

古語「かなし」についての考察

著者	滝口 美穂
雑誌名	清心語文
号	14
ページ	29-40
発行年	2012-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000209/

古語「かなし」についての考察

滝口美穂

はじめに

古語「かなし」には大きく分けて二つの意味があるとされている。壽岳章子（一九五二）はその二義を「一つは哀切、一つは恋愛情緒」と分けながらも、「出発となる情意は、胸に迫る切ない生理的なもの」だという点で、「ふるさとを一にする」と述べている。また松浦照子（一九七八）は二つの用例を挙げ、「泣く」に帰結する方と、「撫でかしづく」と同様の意味を有する方で分け、陰性と陽性の二面を認めている。このように「かなし」に二つの意味があることを主張する先行論は多いが、阪倉篤義（一九七八）は『万葉集』における「かなし」の用例を分析し、それを次のように表現している。

「かなし」という語の中心的な意味をなすのは、要するに、求めるものの不在によって感じる、満たされぬ淋しさであり、

空しさなのである。求める対象の不在をしめやかに嘆く消極性に対して、むしろこれを激しく志向する積極性を示すが、愛情を意味する「かなし」の場合である。

つまり阪倉は、「求める対象の不在」ということを「かなし」の根本の意義として見ながら、その対象への態度によって二義を区別しているのである。阪倉は「消極性」の方を「悲哀の情のかなし」、「積極性」の方を「愛情のかなし」と呼んでいるため、本稿でもこれに則って同じ表現を用いることとする。

しかし、阪倉も自身の論文で引用しているが次のような用例も『万葉集』には見られる。

うちひさす宮に行く児をまかなしみ留むれば苦しやればすべなし（五三二）

この歌における「かなし」は消極性、積極性の両方の面を確認することができる。「悲哀」または「愛情」に完全に区別できる用例が多いものの、阪倉の主張の通り「求める対象の不在」

という根本の意義は同じであるため、このように意義が区別し
 たい用例が見られることは不思議ではない。^(注1)

「悲哀」「愛情」の二義があることは確認できたが、阪倉はさ
らに表記の違いを指摘している。『万葉集』における「かなし」
 の表記において、愛情の「かなし」は仮名書きされているもの
 しかないのに対し、悲哀の情を表す「かなし」は仮名書きされ
 ているものだけでなく、「悲・哀・憐」などの字があてられて
 いるものが存在する。「悲・哀・憐」といった表記は、愛情の
 方には一切見られないため、阪倉は「両義の間に、ある区別を
おこうとする意識」があつたことを指摘している。阪倉は『万
 葉集』に絞って考察しているが、『万葉集』以外に、『古事記』『日
 本書紀』『日本書紀歌謠』『風土記歌謠』『続日本書紀歌謠』な
 ど他の上代作品も含め検索したので、その用例の一部を引用す
 る。^(注2)

●愛情の「かなし」

1 多摩川にさらす手作りさらさらになにそこの娘のここだか
 なしき(可奈之伎)

2 相模路のよろぎの浜の真砂なす兎らはかなしく(可奈之久)

思はるるも

(万葉集・東歌武蔵国歌・卷十四・三三七三)

3 筑波嶺に雪かも降らる否をかもかなしき(加奈思吉) 兎ろ
 が布乾さるかも

(万葉集・東歌常陸国歌・卷十四・三三五二)

●悲哀の「かなし」

4 三度挙りたまひしかども、かなしき(哀) 情に忍びず、頸
 を刺すこと能はずて、……(古事記・中卷)

5 常世へに雲立ちわたる玉匣はつかにあげし我ぞかなしき
 (加奈志企) (風土記歌謠)

6 春の野に霞たなびきうらがなし(悲) この夕影にうぐひす
 鳴くも(万葉集・卷十九・四二九〇)

右に示した用例のうち、1〜3は愛情の「かなし」、4〜6
 は悲哀の「かなし」を表していると判断できる。例えば、用例4、
 6のような表記があてられている「かなし」は悲哀の方にしか
 見ることができない。よって、『万葉集』以外の上代の作品に
 おいても、「かなし」の二義には表記の区別が見られるとわかっ
 た。ただし、阪倉は愛情の意味で使われる「かなし」は東歌や
防人歌にのみ見られるとも指摘している。つまり愛情の「かな
 し」は使用される地域が限定される方言であつたということに
 なる。方言であれば、愛情、悲哀それぞれを同様に扱うべきで

はないことになるが、今回はそこまで掘り下げることができなかったため、扱わないこととする。

一、中古、中世の用例分析

上代の「かなし」には、悲哀と愛情の二義が見られ、その二義は表記の違いによつて区別の意識が見られることを確認した。中古、中世においても「かなし」には二義存在すると考えられるが、中古以降の作品は仮名書きされたものが一般になるため、「表記の区別」という観点はなくなるはずである。では中古、中世における「かなし」の二義にはどのような区別が見られるのかを次に確認する。(注³)

●悲哀の「かなし」

- 7 男、「都へいなむ」といふ。この女、いとかなしうて、馬のはなむけをだにせむとて、おきのみで都島といふ所にて、酒飲ませてよめる。(伊勢物語・百十五段)
- 8 其の結縁の功德によりて、忽ちに罪を滅ぼして、命延びにけり」と思ふに、哀れにかなしうて、……

(今昔物語・卷二四二二二)

- 9 人のなきあそばかりかなしきはなし。

(徒然草上・第十三段)

- 10 ほど経るままに、せむ方なうかなしう思さるるに、御方々の御宿直なども、絶えてしまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば……(源氏物語・桐壺)

●愛情の「かなし」

- 11 今とは見えしまでいとあはれと思ひてうしろめたげにのたまひしを、と思し出でつつ、この君をしもいとかなしうしたてまつりたまふ。(源氏物語・橋姫)
- 12 よき人の御ことはさらなり、下衆などのほどにも、親などのかなしうする子は、目たて耳たてられて、いたはしうこそおほゆれ。

(枕草子・249段 世の中にあほいと心憂きものは)

- 13 「…父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔も見で死ぬべきこと」と嘆く。(源氏物語・明石)

- 14 宮はいみじうつくしう大人びたまひて、めづらしううれしと思して陸れきこえたまふを、かなしと見たてまつりたまふにも、思し立つ筋はいと難けれど、……(源氏物語・賢木)
- 右に示した用例のとおり、中古、中世にも「かなし」には悲哀と愛情の二義が存在することが確認できる。この点に関しては上代と変わりない。だが、ここで愛情の「かなし」における、

用例11、12に注目したい。まず、それぞれ「かなし」の対象としているものを確認すると、用例11は「この君」、用例12は「子」を対象としている。いずれも子どもや女房など、庇護に値するものを対象としていることから愛情の「かなし」と判断したが、この二例において「かなし」は「かなしくす」という形で文に現れていることに気づく。一部の辞書でも次のような記述をするものがある。

● 古語大辞典（一九八三）

「かなしくす」：いとおしいと思う。かわいがる。

● 岩波古語辞典補訂版（一九九〇）

「かなしうす」：何をしてもし足りないほどかわいがる。

ここに立項されている「かなしくす」には、通説の二義のうち「愛情」の意味しか記されていない。つまり、「かなしくす」という形が用例上、愛情の方に限定されていると考えられる。では、中古以降愛情の「かなし」には新たな形が出現したということなのか。

今回収集した全三八一例を悲哀と愛情に分類すると、悲哀が三三六例、愛情が五五例という結果となった。愛情の「かなし」は全体の約十四%と、割合としては少ないことがわかった。さらにその愛情の「かなし」において、文に現れる形で区別して

割合を計算すると、「かなしくす」という形は五一%の割合を占めることがわかった。「かなしくす」という形は、分解して考えると、「かなし」がサ変動詞「す」を修飾している形だと考えられる。もちろん形容詞が動詞を修飾すること自体は自然な現象ではない。しかし、用例中の約半数が、このように動詞を修飾した形であり、さらにその修飾される動詞もほとんどが「す」であることは少し不自然ではないだろうか。しかも、この「かなしくす」という形は上代では一例も見られなかった形である。中古になつていきなり、愛情の「かなし」にだけ約半数もの割合で見られるようになったことから考えると、愛情の「かなし」の現れ方に偏りがあると言えるのではないだろうか。

先ほど、愛情の「かなし」にしか見られない「かなしくす」という形を紹介した。一方、悲哀の「かなし」にしか見られない形も存在する。

15 大臣ぞやがて渡りたまへる。いとたへがたげに思して、御袖もひき放ちたまはず。見たてまつる人々もいとかなし。

（源氏物語・葵）

16 こたみは、いと安らかにてあさましきまでくつろかに乗られたるにも、道すがらいみじうかなし。下りてみるにも、

さらに物もおぼえずかなし。

(蜻蛉日記・康保元年七月)

17 あやまりて、その人の子孫の末々にいたるまで、我、守りとならん。ただとくとく、この度の我が命を乞ひ受けよ。いとかなし。我を助けよ。」

(宇治拾遺物語・卷十一六)

右のように「かなし」で終止する形は形容詞にごく一般的な使用形である。だが、この形は悲哀の「かなし」にしか見ることができない。逆に考えると、愛情の「かなし」は「かなし」で終止する形を持たないことになる。これは、形容詞には通常見られない不自然な現象である。では愛情の「かなし」は一切文末にすることがないかというところでそうではない。

18 今ほと見えしまでいとあはれと思ひてうしろめたげにのたまひしを、と思し出でつつ、この君をしもいとかなしうしたてまつりたまふ。(源氏物語・橋姫)

19 女一人より外に、また子もなかりければ、この女をぞまたなきものにかなしくしける。

(宇治拾遺物語・卷九一三)

助動詞類は伴っているものの、用例18、19は愛情の「かなし」が文末で使われている例である。ただし、「かなし」それ自体

で終止するわけではなく、動詞「す」を修飾した形になっている。愛情の「かなし」において、「かなしくす」という形が固定化してきていることがうかがえる。

ただし、このような例は愛情の「かなし」のうち約半数ということから分かるように、「かなしくす」で全て統一されたわけではない。

13 「：父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔も見で死ぬべきこと」と嘆く。(源氏物語・明石)

20 豊後介、あはれになつかしううたひすさびて、「いとかなしき妻子も忘れぬ」とて、……(源氏物語・玉鬘)

右の用例中の「かなし」はいずれも「妻子」を修飾しており、愛情の「かなし」であることは間違いない。これはもちろん連体形として、あって当然の形である。しかし、これにも併行して「かなしうす」が連体修飾する例が見られる。

12 よき人の御ことはさらなり、下衆などのほどにも、親などのかなしうする子は、目たて耳たてられて、いたはしうこそおほゆれ。

(枕草子・249段 世の中にあはいと心憂きものは)

ここで、上代における体言の修飾を確認する。

●愛情「かなしき」

3 筑波嶺に雪かも降らる否をかもかなしき（加奈思吉）兒ろが布乾さるかも

（万葉集・東歌常陸国歌・卷十四・三三五）

●悲哀「かなしき」

4 三度挙げたまひしかども、かなしき（哀）情に忍びず、頸を刺すこと能はずて……（古事記・中卷）

「かなしき」という形は上代から存在したものである。上代では右のように、愛情も悲哀も体言を修飾するときは同じように「かなしき」という形をもつて修飾していた。しかし中古になると、「かなしき」という連体形も有しながら、愛情の「かなし」にのみ、「かなしうする」という形も用いられるようになっていくことが分かる。だが全用例中、愛情の意味で「かなしき」が用いられているものは、1%に満たなかった。以上より連体においても、「かなしうする」の方が愛情においては主流で、「かなしき」は存在するけれども、上代に比べると見られる数が少なくなっていると考えられる。

また、次に挙げる用例のような「かなし」の使われ方も、「かなしくす」以外に見られる使われ方である。

●愛情の「かなし」

20 ことなる事なきはまた、これをかなしと思ふらむは、親

なればぞかしとあはれなり。

（枕草子・249段 世の中にあほいと心憂きものは）

21 風吹けば沖つしら浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむとよみけるをききて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。（伊勢物語・二十三段）

●悲哀の「かなし」

22 大願を立つれど、遙かなる世界にて、風の音に手もえ聞き伝へたてまつらぬを、いみじくかなしと思ふに、老の身の残りどどまりたるもいと心憂けれど、……（源氏物語・玉鬘）

23 わりなく、身心憂く、人つらく、かなしくおほゆる日あり。（蜻蛉日記・安和二年八月）

右の用例は主に「かなしと思ふ」という形で現れている用例である。用例20、21が愛情、22、23が悲哀の「かなし」である。「かなしと思ふ」という形は、愛情、悲哀どちらでも見られる形であり、上代でも見られる用例である。

他にも「かなしく思ふ」「かなしくおほゆ」「かなしく見る」「かなしく聞く」などといった表現も存在するが、「かなしと思ふ」と表す内容がほぼ同じであるため、全て同類と考えてよいだろう。次に挙げる用例24、25がその一部である。

24 「かかる音を弾かむ」とのたまはず。この浜つ風の荒き

音に、いとかしこく合はせて弾きたまへるを、大将かなしう聞きおはす。(宇津保物語・楼の上・下)

25 宮はいみじうつくしう大人びたまひて、めづらしううれしと思して睦れきこえたまふを、かなしと見たてまつりたまふにも、思し立つ筋はいと難けれど、……(源氏物語・賢木) 愛情の意味で使われている「かなしと思ふ」は、愛情の「かなし」全三八一例中十例見られ、割合にして二六%を占めることになる。先述した「かなしくす」が約半数占めていたのに比べると、「かなしと思ふ」は少ない。だが、無視できるほど少数とは言えないかもしれない。「かなしと思ふ」のような形も「かなしくす」について多く見られたのは、「かなし」がそもそも情意を表す語であることに起因すると考えられる。やはり、愛情の「かなし」は「かなしくす」に完全に一元化されたというわけではなく、情意を表す形容詞としての「かなしき」や「かなしと思ふ」といった形と並存していることが分かる。以上の内容を右の表一にまとめている。なお、「連体」のうち「愛情」の方で「(かなしき)」と括弧書きで表記しているのは、「かなしき」という形が存在しないわけではないが、見られる数が少ないことを示すためである。

※表一

現れ方		意味
	文終止	愛情
	連体	かなしくす
	かなしうする(かなしき)	かなし。
	かなしと思ふ	かなしき

ここで、「かなしくす」にもう一度話を戻す。「かなしくす」は先述した通り上代には見られなかった形である。だが、中古以降よく見られる形となり、逆に「かなし」それ自体での終止形や連体形など、形容詞にあつて当然の形があまり見られなくなっている。そして、「かなしくす」が現れる用例を見ると、11、26のように「かなしくす」の対象となるものを、格助詞「を」を用いて明示してあるのが分かる。

11 今はと見えしまでいとあはれと思ひてうしろめたげにのたまひしを、と思し出でつつ、この君をしもいとかなしうし^{たてまつりたまふ}。(源氏物語・橋姫)

26 女一人より外に、また子もなかりければ、この女をぞまたなきものにかなしくし^{ける}。

(宇治拾遺物語・卷九一—三)

27 「これは、故衛門督の末の子にて、いとかなしくしはべりけるを、幼きほどに後ればべりて、姉なる人のよすがに、かくてはべるなり。(源氏物語・帚木)

28 容貌心もすぐれてものしたまふこと、母上のかなしうしたまひて、面だたしう気高きことをせん、とあがめかしづかると聞きはべりしかば……(源氏物語・東屋)

また27、28のように、必ずしも格助詞「を」で対象が示されているわけではない例もあるが、「かなし」の主格は、用例27の場合「故衛門督」、用例28の場合「母上」であることが、対格として現れていることは明らかである。

このように格助詞「を」を取ることは動詞の特徴として挙げられる現象である。先述の終止・連体において「する」を伴わない形が見られないまたは少数であることも踏まえれば、上代においては愛情と悲哀に意味上の区別しかなかった形容詞「かなし」が、中古になり、愛情の意味について「かなしくす」という動詞を派生させたと考えるべきではないだろうか。もちろん先ほど確認したとおり、愛情の「かなし」全てが「かなしくす」に統一されたわけではないが、本来の形容詞としての形を

しのぐほどに、動詞的振る舞いをしている「かなしくす」という形が見られるようになっていたのである。

二、動詞形との関連

「かなしくす」が動詞化しているとすると、「かなしむ」「かなしぶ」など上代から存在している「かなし」の動詞形とはどのような関連があるのだろうか。本節では、「かなしぶ」「かなしむ」「かなしがる」について考察した関一雄(一九八一)を踏まえて検討したい。

関によると、「かなしぶ」は『源氏物語』とそれ以前の作品に比較的多く用いられ(中略)「かなしむ」は宇津保物語にも用いられるが、多くは源氏物語以後の作品に現れ」と説明されている。また中古における「かなしぶ」と「かなしむ」が表す意味としては、「かなしぶ」は悲哀も愛情もどちらも意味として持つのに対し、「かなしむ」は悲哀の意味しか持たないとも関は説明している。関が論文中で紹介していた用例をここに引用する。

●悲哀の「かなしぶ」

29 つみにうせ給ひぬれば、又これをかなしびおほすこと限

りなし。(源氏物語・桐壺)

●愛情の「かなしぶ」

30 この子やしなひもてゆくままに、たまひかり輝きて見ゆれば、「あはれ、おほぢおはせましかば、いかにいつきかなしびやしなひたまはまし」と思ふもかなし。

(宇津保物語・俊隆)

用例29は悲哀の「かなしぶ」、用例30は愛情の「かなしぶ」である。関の説明する通り、「かなしぶ」に関しては用例29のような悲哀の意味でも、用例30のような愛情の意味でも用例が確認できる^(注4)。中古で「かなしぶ」「かなしむ」は計二七例しか見られなかったが^(注5)、そのうち愛情の意味を表すものは右に示した用例30、注4に示した用例の二例しか見られなかった。

ちなみに上代でも「かなしむ」「かなしぶ」という「かなし」の動詞形は見る事ができるが、いずれも悲哀の意味でしか用例は確認できなかった。

32 「我が君は死なずて坐しけり」と言ひて、手足に取り懸かりて哭きかなしみき。(古事記・上)

33 其の兄の雨に沾るるを見て、かなしびうたよみして曰く、
……(日本書紀歌謡)

上代では一例も愛情の「かなしむ」は確認できず、中古ではわずかに二例しか確認できなかったわけだが、中世においては愛情の「かなしむ」は確認できるのか。

この点について、関は『今昔物語集』の「かなしむ」を分析し次のように述べている。

今昔物語集の「かなしむ」はその語基の形容詞「かなし」の意味の陽陰二面を受けついでいることを示しており、その文脈に應ずる意味を明確にする必要上から、多くは複合動詞の成分として用いられることになったものと考えられるようである。

つまり、愛情の意味であれば「愛す」と複合して用いられ、悲哀の意味であれば「泣く」「嘆く」などと複合して用いられるということである。関の主張に基づいて『今昔物語集』の用例を引用すると次のようなものが挙げられる。

34 老乱の身に飲食せずすでに死なむとす。悲しいかなや、今日のかかむなを備えざること」と言ひて、泣きかなしむこと限りなし。(今昔物語集・卷九 二二)

35 夫婦もともにこれを喜び思ふほどに、月満ちて端正美麗なる男子を産めば、父母もこれをかなしみ愛して、目を放たず養ふほどに、

（今昔物語集・卷二六・五）

34は悲哀の意味、35は愛情の意味を表していると判断できるが、『今昔物語集』では「かなしむ」の一語をもって、二義どちらも表せていることがわかる。

また関は、『今昔物語集』の「かなしむ」の分析でさらに次のようなことを述べている。

こうして「かなしむ」が「可愛がる」の意味用法まで及ぶようになると、前述の通り「かなしがる」の存在理由は失われ、この作品にその用例の確かなものを見出しがたい。

関は「かなしがる」という形が「かなしむ」によって衰退していったことを指摘している。では、「かなしくす」と「かなしがる」は、ほぼ同時期に消滅していった同義語だということなのか。関は「かなしがる」が見られるようになるのは主に平安後期とした上で、「男性の手になる土佐日記や三宝絵詞中巻に「かなしがる」が取り入れられた」と述べている。つまり、「仮名文らしさを強調」するために「かなしがる」を用いたと説明している。「かなしくす」と「かなしがる」はほぼ同義語のように見えながらも、「かなしくす」の方がより幅広い範囲で、愛情の意味を示していたと考えられる。

ここで、中世の作品に確認された「かなしくす」を用いた用

例を引用する。

36 其れをも、此の児を此くかなしくすれば、わが子のようにぞもてかしづきける。

（今昔物語集・卷二六・五）

中世の作品において「かなし」またはその動詞形が用いられた例は二六七例見られた。そのうち一〇五例が「かなしむ」「かなしぶ」といった動詞形で用いられていた。つまり中世において動詞形の占める割合は約四〇%である。対して中古に見られる動詞形の割合は約七%であるので、やはり中古に比べると動詞形が見られる割合は増えていることがわかる。また、全用例中「かなしくす」という形で用いられているものは中世には十二例しか存在しなかった。中古では愛情の「かなし」全用例中約五一%を「かなしくす」が占めていたのに比べると、格段に見られる数が減つてることがわかる。対して愛情を意味する「かなしむ」は、十六例と「かなしくす」を若干上回る結果となった。

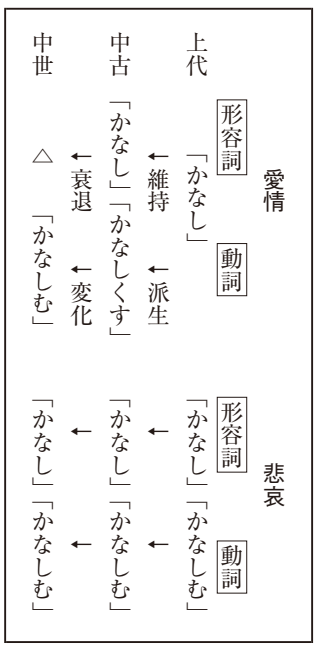
三、結論

以上の考察によって導かれた「かなし」の変遷を表二に示す。

上代において「かなし」の二義には品詞上の差は見られなかつたが、中古では愛情の「かなし」にのみ「かなしくす」という形が生まれる。中古における愛情の「かなし」には、上代に引き続き形容詞としての働きも見られるけれども、約半数は「かなしくす」という動詞的働きをする形となっている。上代からもともと、「かなし」には動詞形の「かなしむ」という形が存在した。上代から中古にかけて、このほとんどは悲哀の意味を表すものであった。よって、中古から見られるようになった愛情の「かなしくす」という形は、悲哀に「かなしむ」という動詞形が存在するのに併行して存在しているように見える。愛情の「かなし」のうち約半数の用例に、動詞化という品詞の変化とも言うべき大きな変遷が見られたことが判明した。だが、中世になると、「かなしむ」が愛情も悲哀も表すようになる。この統一と同時に「かなしくす」は衰退していく。愛情の「かなし」は中世になると形容詞としての形もほとんど見られなくなり、これが現代の私たちの目に触れなくなっていく消滅の初期段階だと考えられる。古語「かなし」には二義存在するということは、現在共通の認識としてある。しかし本稿では更に、「かなしくす」によって、その二義は文脈上の意味でしか違いを判断できないものではなく、中古においては品詞論上の違いも存

在していたことを論じた。

※表二



注1 原則「悲哀」は死や別れ、孤独などを対象とし、「愛情」は子や愛する女性を対象とすると規定する。

- 2 「かなし」の部分に「愛し」や「悲し」といった漢字がすでにあてられているものが多数存在したが、今回は一律に「かなし」とひらがな表記に改めた上で引用している。
- 3 本稿では中古の作品のうち『源氏物語』『伊勢物語』『竹取物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『宇津保物語』『土佐日記』『大和物語』から用例を検索している。
- 4 関は「かなしむ」は悲哀の意味しか持たない」とし、右

の用例も悲哀の意味でとっている。

「ただ我恋ひかなしむむすめの、帰りおはしたるなめり」とて、泣く泣くごたちをいだして、いだきいれさす。(源氏物語・手習)

だがこの場合、「かなしむ」は「むすめ」を修飾しており、文脈上も愛情と捉える方が妥当だと考えられる。

5 私が検索に使用した中古の作品の中で見られた用例数を意味する。

本文

万葉集、日本書紀・古事記・上代歌謡、源氏物語、今昔物語集、平家物語、方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄：日本古典文学全集

伊勢物語、竹取物語：新潮日本古典集成

落窪物語、蜻蛉日記、枕草子、宇津保物語、土佐日記、大和物語、宇治拾遺物語：新編日本古典文学全集

参考文献

壽岳章子（一九五二）「多義成立の一考察―「かなし」の語史

と関係して―『西京大学学術報告・人文』第一号

松浦照子（一九七八）「かなし」を中心とする感情形容詞の

一考察―『源氏物語』を資料として―『国語学研究』第十八号

阪倉篤義「かなし」の意義（『語文論叢』一九七八）桜楓社所収
関一雄（一九八二）「かなしぶ」「かなしむ」「かなしがる」小

考：中古仮名文学の用例について『山口国文』第四号

古語大辞典（一九八三）小学館

岩波古語辞典補訂版（一九九〇）岩波書店

（たきぐち みほ／二〇一二年卒業）